

但 申

略歴

2017 年
北海道大学 農学部 卒業

2017 年 9 月~
Wageningen University and Research Centre
Animal Sciences
修士課程 進学予定

2017 年に農学部を卒業し、オランダ Wageningen 大学の Animal Sciences 修士課程に進学する予定の但 申 (たん しん) と申します。まだ入学前ですが、今まで大学院進学にたどり着くまでの経験について少しお話しさせていただきます。なお大学の紹介については他の方に譲ります。実際に進学した後にに関する体験談も今後更新していけたらと思います。

海外大学院を目指すきっかけ

私は大学に入ってから、動物の行動をその生活環境と結びつけながら配慮し、動物の生活の質 (QOL) を向上させるような Animal Welfare (動物福祉) を、キャリアを通して目指していこうと考えました。農学部畜産科学科での実習や研究、牧場見学および動物愛護ボランティアで得られた経験が私の意志を後押ししました。とくに国内の畜産の現場において Animal Welfare に関してまだまだ課題が残っており、その改善に取り組む人は少ないと実感しています。

そのなかで、大学院から本格的に Animal Welfare について勉強しようと自然と考えるようになりました。しかし日本国内では現在 Animal Welfare に関する研究がまだ少ないですし、たとえあるにしても学校や研究テーマに対する選択肢がかなり限られています。それならば大学院から

Animal Welfare に関してはるかに普及している欧米諸国で学ぼうと考えるようになり、自分なりに情報収集を始めるようになりました。

2016 年 7 月にイギリス・Edinburgh で国際応用動物行動学学会 (ISAE) が開催されました。その学会に世界中から Animal Welfare の最先端の研究に携わる研究者が集まるので、情報収集およびコネ作りのために思い切って個人で参加することにしました。勇気を出して単身海外の学会に乗り込みましたが、それが自分の大学院進学への決め手となったと思います。学会を通して、Wageningen 大を含むいくつかの大学が出願候補として決め、さらに自分が大学院で取り組みたい具体的な研究テーマも思い浮かびました。

奨学金

大学院出願に先立ち 8 月から 11 月までの間に、自分が応募可能な奨学金にひと通り応募しました。書類のなかで特に学修計画に関しては海外大学院で学んでいる先輩方に何度も添削をお願いしました。結果的になんとか 3 月に JASSO の海外大学院学位取得型奨学金でなんとか内定をとることができました。先に別の奨学金の書類審査も通りましたが、面接で自分が主張すべきことをしっかり言い切れなかったために合格できませんでした。JASSO の面接ではその反省を活かし、本番で堂々と受け答えできた気がします。面接まで来て油断しないこと、本番でたとえ緊張しても、予想外なことを聞かれても答えられるように準備すること、そして簡潔に分かりやすく話すように心がけること。それが面接における自分の反省点であり、皆さんへの助言です。

出願準備

奨学金の取得が遅れたため、一部の大学に出願することができませんでした。それでも志望校の中でイギリスの Edinburgh 大と Wageningen 大の修士課程は奨学金なしでもアプライすることができたの



で、奨学金の合格を待たずに出願しました (11 月～12 月)。

成績は 4 年前期までのものを用いました。英語のスコア (IELTS) に関しては幸いなことに事前に出願条件を超える点数を取得していました。ちなみに大学に出願した後にスコアがさらに更新したので再度学校して、どうやら受理してもらえたようです。学部の成績と英語スコアはあくまで足切りでしかないという噂も聞きましたが、本当の評価基準はどうかは分からないので、できるだけ余裕をもったものを取ったほうが良いと思います。とくに英語に関して、実際留学先ではアカデミックな英語をほぼ不自由なく使えることが当たり前になるので (学会でそう実感しました)、スコアに関わらず進学までに可能な限り英語に慣らせたほうが良いと思います。

志望動機書 (Statement of Purpose; SOP) と履歴書 (Curriculum vitae; CV) は先輩方やネイティブスピーカーの知人に何度も添削してもらいました。SOP に関しては、奨学金応募の際に用いた学修計画をベースに書きました。SOP では、今までの経験をふまえ、どうしてこの大学のこの専攻に行きたいのかについて論理的に展開するのが重要だと思います。また両大学とも事前に研究テーマや指導教官を決めることを義務付けていないのですが、私は具体的な研究計画が頭に入っていること、およびその計画に関して指導教官になる予定の人と事前にメールで打ち合わせしたことも SOP に盛り込んでアピールしました。

推薦書は 1 通のみ必要だったので、研究室の指導教官に書いてもらうようお願いしました。奨学金申請のときに何度も書いてもらったので、さすが慣れていたようです (笑)。

大学選び

結果的に Wageningen 大には出願して 1 か月弱、Edinburgh 大には出願して 3 か月で合格通知を頂きました。進学先決めに関して後悔をしたくないと

いうことで、その後現地に視察に行ってきました。キャンパスを訪れ、現地の研究者や学生とお話した結果、自分が予想していたのと違う点も色々発見しました。まさに百聞は一見に如かず、でした。最終的にキャンパスやその周りの町の環境、雰囲気および施設がより自分に適している Wageningen 大の方を進学先として決めました。

これからの予定

Wageningen 大の修士課程では 1 年目で専門科目を学び、2 年目で修士研究を行います。いわゆる必修科目は少なく、カリキュラムは基本的に自分自身のニーズに合わせて設定します。また北大の自分の学科と比べて授業自体に割かれる時間が比較的少なく、その代わり空き時間で自習したり、グループワークをします。要するに Wageningen 大在学中に有意義に過ごせるかどうかは自分次第です。私の 1 年目の目標は Animal Welfare の基礎を学び、その後の研究に発展していくことです。そのためにどういう科目を取ればいいのか、どういうスケジュールを組めばいいのかについて改めて考える必要があります (事前視察でかなりアイデアが得られました)。そして 2 年目ではおそらく半年間の修士研究を 2 回行う (違う研究室に配属しながら) ことになるので、配属する研究室や研究テーマについて状況に合わせて検討していきます。また学業の合間には欧州各地の牧場も見学して、欧州の畜産の現状について把握したいです。

海外大学院を目指している皆さんへ

1. 海外大学院か北大か

この文章を読んでいる皆さんはきっと海外大学院に少なからず関心を持っているはずですが、しかしここで、自分が海外大学院に行く必要があるのかどうか、今一度考えてみてほしいです。大学院に行きたければ、北大の大学院へは大多数の方が難なく進学できると思います。自分の今までの渡航経験から言



わせると、正直日本ほど恵まれていて、慣れ親しんでいる国はありません。また皆さんが所属している北大も分野によっては世界に引けを取らないほど研究・教育が充実しています。皆さんはそのまま北大の恵まれた環境で勉強し続けることは可能です。それでも馴染みのある北大キャンパスを離れ、日本語が全く通じなくて、不安要素が多く、また経済的な負担が大きい、海外の大学院に進もうとするならば、その理由は何でしょうか？人それぞれ状況は異なりますが、総じてそれが皆さんの志望動機になります。そして奨学金の面接でおそらくそのことを尋ねられることでしょう。自分にしかない、ONLY ONE な志望動機を模索してみてください。

2. 学部留学について

私は学部在学中に短期の留学をしました (NZ, USA) が、長期の交換留学をしていませんでした。たしかに長期留学には色々なメリットがありますし、長期留学を経験しないと大学院進学は厳しいという印象を皆さんは持っているかもしれませんが、私は必ずしもそうではないと思います（あくまで自身の意見ですが）。海外の大学院が見ているのは、留学したという経験ではなく、その経験をどう今後活用していくということです。当然長期留学しなくても得られる経験がありますし、それを自分の専門に活かしていくことは可能です。私の場合短期留学、ボランティアおよび道内の牧場での経験がそうでした。大学院の審査員が SOP でそれらをしっかり見てくれたおかげで、合格に近づけたのだと思います。

もちろん必要があればぜひ交換留学にもチャレンジしてほしいです。大学院と違って、交換留学は経済的なサポートが十分得られますし。それでも交換留学をするか否かに関わらず、学部生（または北大の院生）としての時間を大切にしてほしいです。それは後々大学院進学にも活かせるからです。

3. 新渡戸カレッジについて

海外大学院に関して言いますと、新渡戸カレッジに入ったからといって決定的に有利になるわけではありません。新渡戸生であっても、結局進退は自分の努力しだいになります。

私は新渡戸カレッジの 1 期修了生という名誉ある (?) 肩書きを頂きました。新渡戸カレッジの活動のなかで、分野や職種に関わらず色々な人と交流でき、また短期留学や英語試験などで多大なサポートを頂きました。新渡戸カレッジでの経験は大学院だけでなく、今後のキャリアにも活かせると思います。しかし海外大学院進学に対しては奨学金といった経済的なサポートが得られるような体制がまだ築かれていませんでした。仕方ないことですが、たとえ少額でも奨学金の早期取得が極めて重要だったので残念だと感じざるを得ません。

これから私の後に続いて新渡戸カレッジの後輩も海外の大学院に進学するようになれば、従来の学部内留学だけでなく、海外進学に対するサポート体制がもっと厚くなるかもしれません。もちろん私も微力ながら先輩としてのサポートをしていきたいと思っています。とにかく現状では、新渡戸生は在学中に可能な限り色々な経験を活かすこと、逆に新渡戸に入らなくても海外大学院進学が不利になることはない、と言うしかありません。

4. 国籍について

私は名古屋で生まれ育っていて、永住権を持っていますが、両親の関係で国籍は外国のものになっています。周りの日本人学生とは状況を違っていますが、結果的に海外の大学院への進学を実現させました。たしかに一部日本国籍がないと応募できない奨学金がありましたが、日本国籍じゃなくても進学は十分可能であることを自分が証明したと思います。この文章を読んでいる北大生のなかにも私と同様の状況にいる方がいるかもしれません。しかし敢えて言いますと、海外で自分の学びたいことを学ぶ意志と実力があれば、日本人だろうが何だろうがほぼ関係ありません。今の時代は良くも悪くも実力が全てです。



自分のルーツに過度に拘らずにチャレンジしてみてください。私もできる限りの応援をさせていただきます。

大学院進学に対して、色々自分の準備不足を痛感しましたが、結果的に自分の目標のスタート地点にようやく立つことができた気がします。最後に、大学院を目指す過程で、両親や周りの知人、研究室の指導教官や新渡戸カレッジの関係者から多大なご理解やご協力を頂きました。心より感謝いたします。

